

## 21世紀文化芸術試論

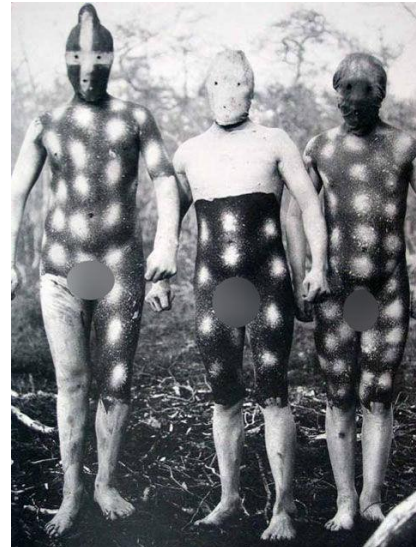
人類の起動させた生産労働の記述、  
人の気質、今と生の呪縛その記述、  
それが文化芸術である。

アートは、生産労働の対極として、  
全く反対のもの、それが20世紀だった。  
21世紀、縮小社会に於けるアートは、  
それとは異なった解釈で始まっている。  
つまり、感動することは生産労働であると、  
実は、それが人類史の持つ本来のアート  
だったのだと、

夥しい先史文化芸術、それは背後に生産労働を持つもう一つの人類を懐疑する生産労働だった。



右上: 石器時代の骨器・木器 左下: 縄文時代の土器・石器・骨器



21世紀のパラダイム、縮小社会に於ける文化芸術とは、

# 芸術とは、生産労働その記述である。

原始芸術、民族芸術、ギリシャ彫刻、現代芸術それらは尽く  
人類の生産労働が何たるか、その記述である。

アートでたんぼ主催 河野 博

有史以前、人は神に逆らう背信の生き物で有る事を、人々は感じていた。そして有史以降、例えばインドでは、

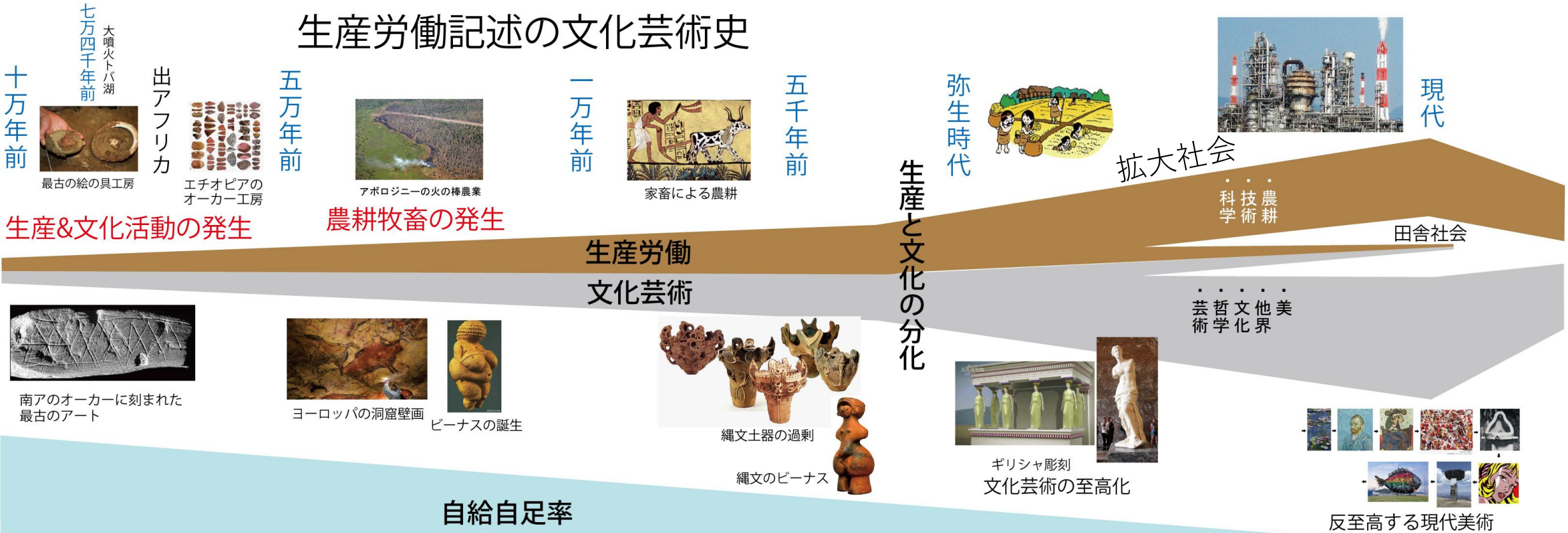
# कर्मन् karman

業（ごう、梵: कर्मन् karman）とは、行為、所作、意志による身心の活動、意志による業は果報と対になる語だが、業の果報そのものを業という場合もある。

# 有史以前、生産活動と文化活動は一体だった。

問題は、狩猟採集か農耕牧畜かではなく、生産労働の起源である。

## 生産労働記述の文化芸術史



その記述の解釈、それは感動することである。

# 感動、それが芸術

それは、もう一つの生産労働である。

セザンヌの、  
人類史的なり  
アリティが、  
鮮明にさらけ  
出したものは、  
カルマの虜で  
ある私だった。

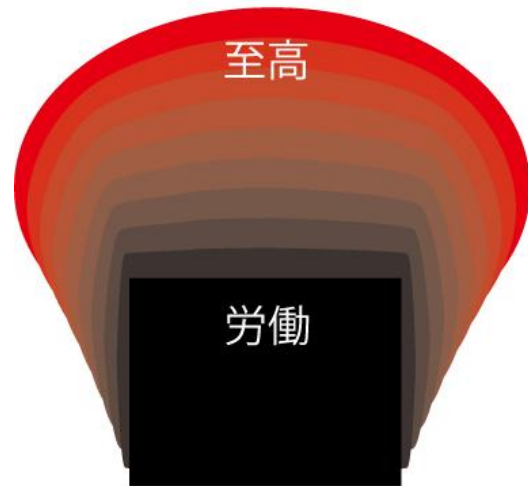




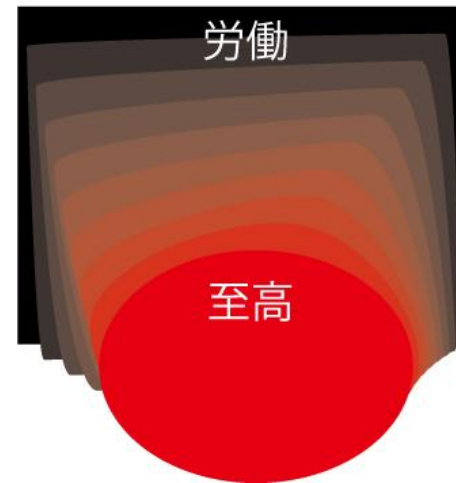
その感動とは、美に照らされた  
鮮明な自分の実像との対面である。

それはホモサピエンスの巨大な生産労働、その一角との直面である。

感動



憎悪



逆に至高なものでその実像が隠蔽されたとき憎悪が生まれる。それが戦争である。

感動と言えば岡本太郎



ピカソに衝撃を受け、モースの教え子であり、バタイユが友人だった、そしてあの縄文土器に打ちのめされた岡本太郎、その太陽の塔、それは日々寡黙に働く人類の正にその生産労働が何たるかなのです。



そして渋谷駅の明日の神話と題された巨大な壁画、  
これもまた人類の生産労働の何たるかなのです。



一日30万人が往来する、井の頭線渋谷駅入り口の岡本太郎の巨大壁画「明日の神話」、これは原爆惨劇の図、そして本質は人間のカルマの図、経済成長が淀んだこの列島の今が、岡本の言う呪術をさせている。しかし、ここが感動へ繋がるなら、それは縮小社会への、新たな産業へのマニュアルになる。

それは全ての感動に言える事だが、**人類史上の感動も又労働と同じ人間固有のもので**、それは、それで終わるのではなく、そこは始まりとしてある。人類史は何時も繁栄の灯火が揺らぐとき、文化芸術を際立たせて来た。

この列島の過剰する夥しいあの縄文もそうだった。だからそこが産む感動は壮烈であるし、それはそのまま新たな時代幕開けその物である。

一遍の言う「**一生踊るが宜しい**」の成立である。

# バタイユは言う

バタイユは「労働」とは、「現在という時を未来の利益のために用いる」と、これに対して、「至高であるということは、**現在という時を、その現在という時以外にはなにもものも目指すことなしに享受することである**」と、今を今の真中で留まれば、在ることの感激を全身で受ける事になる。それは正しく美の体感だが、労働は今を明日へ、今を物化する事に尽力する。それは、言わば真摯な生なのだろうが留まる事を知らず、そして人類は戦争を自然破壊を生業にする。だから歴史上農耕では、常に祭儀を伴った。

感動が現出させるものが人類史に発生した生産労働その物の姿である。

芸術に感動すること、それは  
新たな産業、生産活動である。

20世紀の感動から21世紀の感動へ、  
それは「生産は危うい」と言う原像  
から立ち上がる起業である。

ゴッホ

こののたうつ風景、  
空の青を補職する  
雲の小金色が微妙に  
光り、留まらぬ畑や  
めくり合う山々を照らす。  
靈魂の雲は空の青を抱え込  
み大地をくねらせ、見る者  
を真中に釘づけにする。

そこは

茫洋とした木々の緑、  
雲は伺い、大地はうねる、  
飽くまでもその狭間の出来  
事なのだ。

感動の坩堝なのだ。

そして、この前景が、前景  
を作る感動が即ち人間の  
カルマ、生産労働である。





<http://www.kaen-heritage.com/doki/taro/#>

岡本太郎

「激しく追いかぶさり重なり合って、  
隆起し、下降し、旋回する隆線紋。  
これでもかこれでもかと執拗に迫る緊張感。  
しかも純粹に透った神経の鋭さ。  
堂々芸術の本質として超自然的激超を  
主張する私でさえ、  
思わず叫びたくなる凄みである」

**つまり今、それは再びそれが何なのかと問うて  
いる21世紀です。それらはもう感涙の対象を超え  
て人類のカルマへの回答なのである。**



縄文人にとって、これらは  
現代人のような感動の対象では無く、  
空は空ではなく、  
海は海ではない縄文人の、  
それは営みの中の通常の事柄だった。  
であるが故に現代は感動する。



異化を行うためには、自分自身の精神と情動(ほとんど肉体の、といていいほどの情動)の深い経験をする事が必要である"(大江健三郎)



## 人類は、なぜビーナス作ったのか？

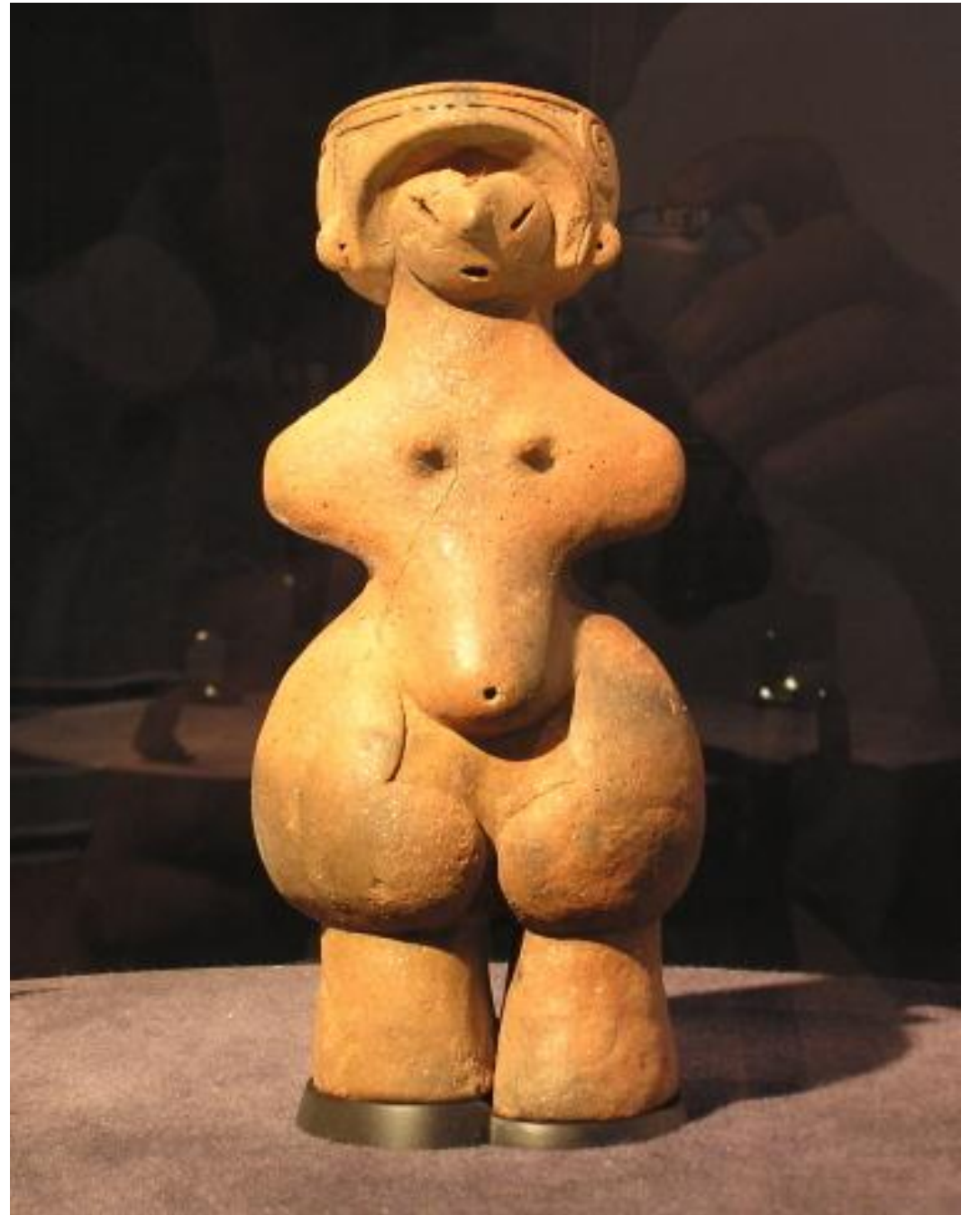
人類史に忽然と現れたビーナス、  
これらは牧畜生産に起因した人類の繁殖の  
異変の記述だった。女性の崇高さの表象  
それは家畜の詳細である。



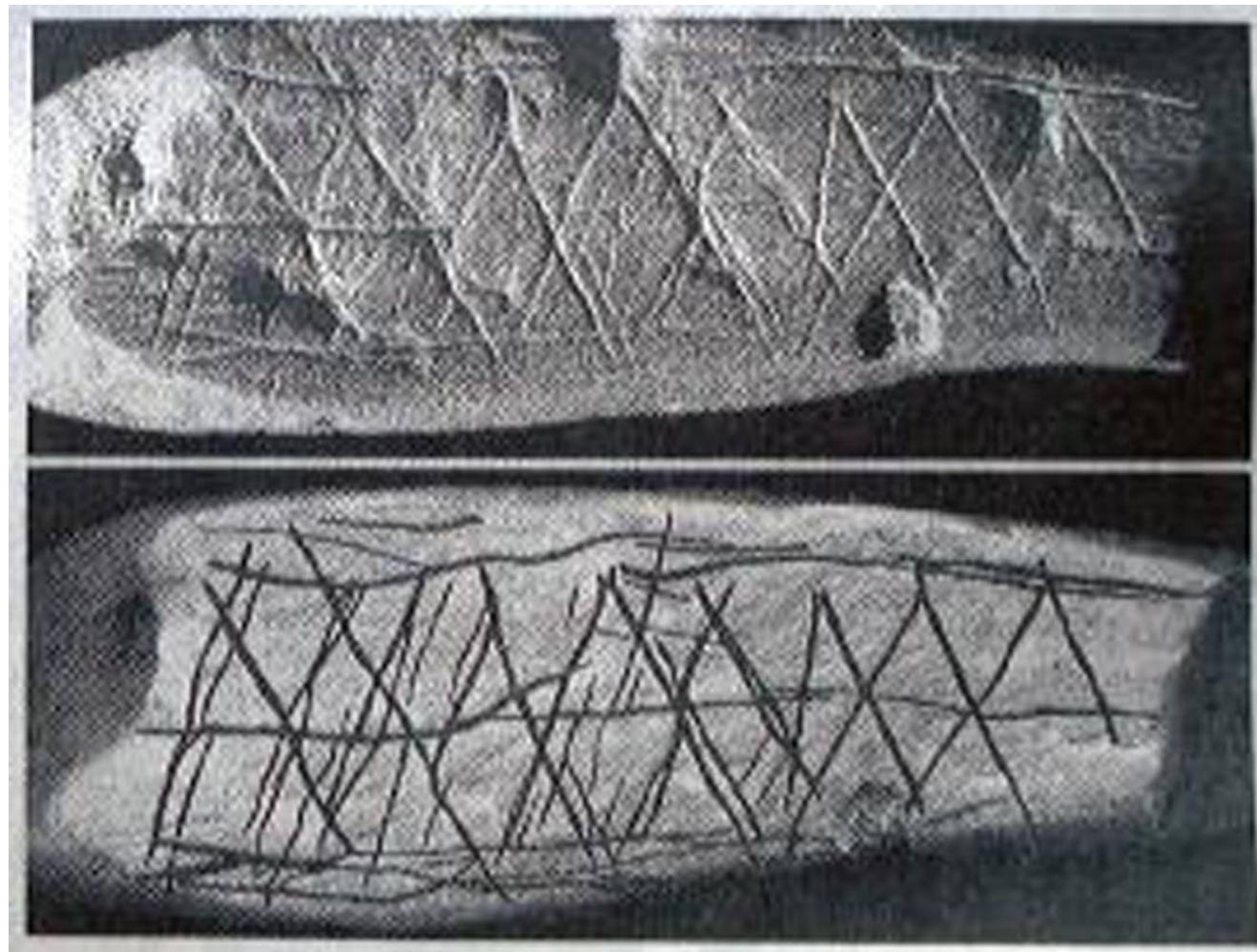


**35,000年前**（ドイツ）  
ホーレ・フェルス洞窟

土偶は牧畜を、  
縄文土器は農耕を、  
この感動が鮮明にする  
生産労働の記述は、  
ビーナスが、実は  
家畜が何たるかの  
記述である。  
であるが故の感動は、  
循環型の生産を  
促してきた。



もっか人類最古の芸術と言われている。



# 人類最古の生産設備 “絵の具工房” 南アの洞窟



# オーカー



ナミビア北西部の川岸で、  
オーカーを髪に塗る  
ヒンバ族の女性達、  
温かみのあるその赤い色は、  
古代から変わらず人々の  
間で体の装飾に広く使われてきた。  
それは、生産労働が何か  
その記述が始まってしまった  
のです。

音楽や踊り美術など始原の  
文化芸術は、即ち生産労働の記述は、  
生産労働の別名である二項対立を  
透過している。



何処までも拡大する  
生産至上社会の数式と、  
巨大化し絶滅した  
アンモナイトの数式は  
酷似しているのでしょう。  
必要なのは、  
文化と未分化な生産の  
数式です。



縮小社会とは、  
感動が、  
生産労働の本質を  
より明分化させる  
社会である。

2019/3/10